
真剣で私に恋しなさい

零崎零王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい

【Nコード】

N4560Y

【作者名】

零崎零王

【あらすじ】

2年S組に在籍する久我恋は川神学園でどうなるのか！？

第一話（前書き）

どうも零崎零王です。初めましての方は初めまして
それではどうぞ

第一話

side 大和

誰もが逃げられない、恐ろしい奴がやってきた！

その名は『月曜日』

朝まどろみながらそのことを認識していると……
布団が何者かの手によってはがされた。

「おはよう大和、そして好き」

「おはよう京。好意は嬉しいがお友達で」

「……フラれた。おいしい」

「おしくない」

それだけ言つと京は部屋から出ていった。

「やあ、お目覚めかい大和」

今度はロボが入って来た。

「クッキー。部屋の鍵を開けるのをやめろって、いつも言ってるだろ？」

「お前が早起きしないのが悪い」

その理屈はおかしい。

「だいたい大和が早起きすれば、京にも襲われないし鍵だって開け

ないよ？」

「あーなるほど……って違っただろ。クッキーが悪い」

「なんでそういう事言っただよ。僕は和のためを思っただってんだろ！」

「分かったからそう怒るなよ」

世界の九鬼財閥が、最先端の技術で作ったロボが学生寮にいるのかはおいといて。

早く学校に行かなきゃ、みんなに悪いな。

「ごめん待ったか？」

「私も来たところ」

「デート気分を出さなくてもいいから」

椎名京。川神学園2-F。

昔は家庭の事情もありイジメの対象だった風間ファミリーの力で助けてみれば……

「アイラブユー」

惚れられた。

「おはよう」

「おはようガクト」

「おはよう筋肉バカ」

「朝からそれはないだろ大和」

「冗談だって今日もカッコいいよ」

「だろー」

島津岳人。2-F熱血馬鹿ゆえに情に脆く心優しい

常に女の子にモテたいと思って行動しているのが玉に瑕。

「おはようみんな」

「おはようクリス」

川神市の姉妹都市・ドイツのリューベック市からの留学生。

真っ直ぐで礼儀正しいが反面、負けず嫌いでプライドも高い
策を使って戦う俺のことが嫌いだったが、少しマシになったようだ。

俺とガクトと京とクリスの四人で多馬川沿いを歩いていく。

今日発売の週刊誌を見ながら歩いてくる男も合流。

「おはよう師岡卓也。趣味ゲームや漫画」

「説明的だね」

気のせいだ。

「そうだクリスマス面白い物を見せてやるよ」

俺は犬笛を吹いた。

「なにも起きないじゃないか」

あれ？

s i d e 大和 e n d

s i d e 久我

同時刻多馬川

今日もいい天気だな。さてとあいつらは元気かな？

笛を吹くと周りに猫が集まってくる。

「元気だったか？ミケ、トラ、シャム？」
「にゃあ」

前に昼寝をしていたらなぜか懐かれた。
今は多馬川の近くで近くで飼っている。

ミケ。白と灰色のマーブル模様の猫

トラ。黒猫

シャム白猫

「さて今日のおやつはにぼしだよ」

「にゃあ」

俺からエサを貰おうと周りに集まってくる。

「カルシウムだ。まぐまぐ」

あれ？猫達に混ざって赤い髪でポニーテールの女の子がにぼしを
食べているのが見えるんだが気のせいかな？

「えつと誰？」

とにかく話をしてみよう

「あれ？笛の音が聞こえたから大和かと思ったけど、あなた誰？」

笛で友達を呼ぶその大和って奴は本当に友達なのか？

まあ人それぞれだろ（現実逃避）

名前を聞かれた以上答えないと。

「久我恋だ」

「久我君ね。私は川神一子よろしく」

「えつとそれで……コラやめろ。ミケ、トラ、シヤム」
「あはは、面白いね。久我君って」

笑われてしまった。

「じゃ私もう行くから」
「ああ」

なんだっ たんだ？

「にゃあ」

にぼしを食べれなかったせいで怒っているようだ。

「ごめんな。また今度」

「にゃあ」

「なんだよまだ何か用か？ん？携帯？」

携帯が鳴っているのを教えてくれたようだ。

「ありがとう」

ミケの頭を撫でてやり電話に出る

「僕だよー」

「どうしたユキ？」

「準がねー、待ち合わせに来ないから電話しろーだって」
「マジで？」

時計を見ると待ち合わせの時間をかなり過ぎていた。

「分かった。すぐ行くって伝えて」

「わかったー」

「じゃ行くからな」

「にゃあ」

「分かってんのか」

「にゃあ？」

これ以上あいつらを待たせるのも悪いから早く行くか

side 久我 end

side 大和

「何も起こらないじゃないか」

「そう怒るなよクリス」

どうしたんだ？いつもならすぐ来るのに

「誰か呼んだー？」

ワンコにデコピンをくらわす

「何すんのよぉ」

「何でもだ」

まったく心配かけやがって

「それにしてもワンコ、どこに行ってたんだ？」

「えっと何だっけ？」

「忘れたのかよ」

「何やってんだ？早く来いよー」

「早く行くぞ。ワンコ」

side大和end

side久我

「ごめん待ったか？」

「僕も今来たところです」

「デート気分を出さなくていい。お前が言つと冗談に聞こえないんだよ」

「私はいつでも本気なのですが」

「やめてくれ」

「残念です」

本気で残念そうな顔するな。俺はノーマルだ。

「準とユキは？」

「準はユキがちょうちょを追いかけて、どこかへ行ってしまったので探しに行きました。あっちょうど来たようです」

「ウェイー。僕と一緒にましゅまる食べる？」

「ありがとユキ。準もおはよう」

「おはようさん。相変わらず恋はユキと仲が良いよな」

「僕と恋は相思相愛なのだー」

平和だなー

「危ないですよ？」

「ん？」

空から女の子じゃなくてヤンキーが降ってきやがった。

「朝から一体なんだよ」

「あれだよあれ」

準が指差す方へ目を向けると、川神百代に殴られている
ヤンキーの集団が見えた。

川神百代川。川神院の跡取り。川神百代を倒そう全国から人が
集まる川神に住む人にとってはいつものことらしい

「彼女はいつ見ても美しいですね」

「俺は興味ないな」

「準は少し女の趣味を考え直せ」

ロリコンと呼ばれることになるから

「ねえー何の話ー恋」

「何でもない。早くしないと学校に遅れる」

「そうですねじゃ行きましょうか」

「だな」

「早く行こうよー」

「分かったから手を引っ張るな」

これが俺の日常こんな日が続けばいいな

第一話（後書き）

ここまで読んでいたたぎありがとうございます。
他の小説もあるのに、計画なさすぎですよね本当。
もしよかったら他の作品もどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560y/>

真剣で私に恋しなさい

2011年11月14日22時05分発行